

(三) 「並榎食堂」「まっちゃん」「ベントツ」「即席ラーメン」

学生さんにとって朝・昼・夜の食事の他に一番大切な食事が夜食である。学生寮の夕食は午後五時から七時までと決まっていたから深夜まで学問を熱烈に議論する我々にとって夜食が必要となるのも無理はない。

しかしうまくしたもので大学の回りには三つの夜食場があり、営業時間も深夜十二時迄とあって少なからずお世話になった。少なからずとは不本意な表現であつて毎日でも行きたいのであつたが如何せん所持金の都合で行けない場合が多かつたと訂正したい。

アルバイトの給料が入ったり、奨学金が入金されたりの日出度い日は必ず「並榎食堂」へ赴いた。クダンの食堂は焼肉店である。学生の身分で「お肉」をそれなりの価格で頂ける、この「並榎食堂」はいつも混雑していた。換気扇など無い部屋では煙が充満していたが学生たちの喧騒と喜びの雄叫びも充満していたのが懐かしい。

誰言うことなく「これって本当に牛肉か？」との噂も立ったが「そんな事が気になる野郎は来なけりやいいんだ」との先輩の一カツで皆、黙った。

しかし大学の回りには野良犬が一匹もないとの証言もあつたのも事実。真相は謎のままだが、ガスコンロの上で焼ける肉には確かに怪しげなアブクが立っていた。

「並榎食堂」の近くにはギョーザ屋「まっちゃん」とラーメン屋の「ベントツ」もあつた。「まっちゃん」はオバアサンが一人で切り盛りしていて客が来ると必ず「いらつしやいませい」と変な色気を振りまいていた。若い学生が来店するのはご本人にとつても活力の源泉だつたのだろう。「ベントツ」は月並みなラーメン屋で可も無く不可も無くの評価だつたが、親父はもともと自動車修理業だつた関係で店の名が「ベントツ」

なのだそうだ。

しかし「まっちゃん」も「ベント」もお金があるうちの話。一ヶ月約三十日のうちで金があるのは良くて半分。残りは強靱な精神力で耐えるしかない日々が続くのである。そこには涙ぐましい努力でもって生き延びる寮生がゴロゴロいたので、常連の私も別に悲しく感じた事はない。そして「即席ラーメン」が最後の砦であった。

学生寮の夜が更けると階段の下にある小部屋が賑やかになる。小部屋にはガスコンロがあつて寮生が入れ替わり立ち代り即席ラーメンを作りに来るのである。たいていの場合部屋の先輩が買ってくれたのをパシリの後輩どもが調理をしているのであるが不思議な事にスープの素は先輩がしっかりと持って部屋でラーメンの出来上がるのを待っているのである。調理場でズルイ後輩達が鍋から直接、失敬をした野郎がいたものだから、先輩の自己防衛的発想から生まれた奇策であつた。

「ラーメン出来ました」と部屋まで持ち帰れば、おもむろに先輩がスープの袋を破り味をつけた後、ヨーイドンとなる仕掛けだった。しかしその時には食器の茶碗も既になくなっていて哀れな後輩どもが右往左往しているうちにお汁だけが残る事となる。

ラーメンの品質にも問題があつた。当時は即席ラーメンの黎明期でもあり、現在知

られている有名メーカーの他に、ご当地の小さなメーカーの物も沢山出回っていた。

「出前一丁」「サッポロ一番」「エースコックのワンタンメン」等、一流メーカーの品は一袋三十円もしたが地元の「味一番」「江戸一番」は十円〜十五円で買う事が出来たので大量に買い込んだ先輩が大きな顔をして後輩達に振舞った時代があったものの所詮は安物、下痢をする者が続出し人気は消滅した。誰言うとも無く「ゲリ一番」の汚名までついた。

その後、例の「味一番」や「江戸一番」は店頭で見かけなくなつたが、きっと倒産の憂き目に会つたのではと思料する。

以上、私の学生時代の食事処を網羅してみた。親元を離れてさぞかし辛い思いをしていないかと母は心配していた様子だが、どうして私は色々な「エサ場」から遅しく栄養を摂取しながら自らの青春を謳歌していたのである。金が無いのが楽しいとさえ感じる時もあった。

勉強は二の次でアルバイト三昧の日々でもあったが、無事卒業している。経済学部とは実践の経済と格闘しているうちに単位を自動的に取得できる非常に慈愛に満ちた学部であると納得している。群馬県高崎市における我が青春に万歳！

平成二十四年四月 著